

在日総合誌 抗路

2021.3 第8号

新型コロナウイルスの猛威が止まらない。パンデミック拡散約一年の二〇二一年一月末現在、世界の感染者は一億人、死者二二〇万人を超えたという。地球の歴史は四六億年、微生物が誕生して三八億年、そして地球の生命史は五回の「大絶滅」をへて、いまに至る人類は類人猿が二足歩行を始めて以来七〇〇万年の歴史だという。七七億という過剰な世界人口、乱開発等による自然環境の破壊、経済・移動のグローバル化・高速化などによって、自然の劣化そして生態系全体のバランス崩壊が進行し、人類生存の危機が加速化しているという。人類を悩ませてきた有史以来のウイルス感染症は九〇〇〇年の歴史だともいうが、そうした無限と有限の時はさまざま、私たちは今、世代交代の夥しい繰り返しの末にこうして生を営み、ウイルス禍のなかで苦の連続にさらされている。

お釈迦さまの出家の動機は、生老病死という四苦の自覚にあったことはよく知られている。お釈迦さまの思索の根本は、この苦の連続からいかにすれば人間は救済されうるかであった。迷いと不安と縁切りしない、虚無をこそつかめというのが真意であろうか、生の苦しみ、罪からの救済が人のもつ宗教的な精神の根源であることは間違いない。もとより、人は誰しも、家族そして世代を選択することも逃れることもできない宿命として抱えており、しかもそれが苦の連続によって彩色されるものであるとするなら、時に、生まれてきたこと自体、悔しさに満ちたものとして捉えられることにもなる。それは「寂しさ」といつていいのかも知れないが、生きる根源でもあろう。

今号は特集「『在日』の家族・世代」、小特集1「おんなの語り」、小特集2「自分史の試み」を企画した。今日、「在日」を生きる私たちは、家族・世代その他すべてにおいて運命的な要素を帯びつつ、波瀾曲折の人生を歩んでいる。本号に描かれた物語のなかには苦しみや悲しみ、愛憎などが満ち溢れているが、しかしまた、それら文章の行間には、真実に目を背けない飲びや勇氣、鼓舞、癒やしなどにつながる言葉の数々が見出され、私たちの人生がより豊かなものになればという、ほのかな希望にもつながっている。